

# チュートリアルの本棚

## チューター教員からの推薦図書

次の計算は何を求めているでしょう？

$$0.148 \times 0.210 \times 300 \times 1,940,000 = 18,088,560$$

この値の単位は㎡です。よく使う教科書のA5判（148mm×210mm）、よくある頁数300に中央図書館に所蔵の約194万冊を乗じました。総頁数の概算面積と言え、つくばキャンパスの面積約4km<sup>2</sup>の5倍弱、この広大な面積に活字や図が印刷されています。膨大な知識の宝庫ここにあり、ですね。

読書とは、その宝庫から知識を得る営みです。どんな本から読み始めたらよいのか、そのきっかけ掴みはなかなか難しいでしょう。「学問探究チュートリアル」では、自分が面白いと思えることをどう見つけ、掘り下げるかを学びます。その道は人の数だけあり、どんな本がどのように役立つかも人それぞれです。そこで、チューター教員の経験上お勧めしたいと思った本を、口上とともに展示してみました。本を手に取り眺めてみることも、自分の面白い探しの一助になればと期待しています。

坪内孝司

(学問探究チュートリアル実施委員長/大学執行役員)

※推薦教員の五十音順

書籍名	著者名	推薦教員名	推薦教員からのコメント（50～200字程度）
1 インティマシーあるいはインテグリティー	トーマス・カスリス	大庭 良介	なぜ、西洋人は日本文化を、日本人は西洋文化を、その本質において誤解するのだろうか。そこには、認識の前提となるモノトの見方の違いがあった。
2 眼には眼を	ケン・ウィルバー	大庭 良介	我々は認識のための3つの眼をもっている。狭い科学の眼は限られた認識範囲には有効だけれどモノトの外側しか見てとれない。科学主義が瞑ってしまった眼を開いてみると、そこにはより広い普遍的な知の様式が広がっていた。
3 客観性	ロレイン・ダントン、ピーター・ギャリソン	大庭 良介	科学といえば客観性。でも客観性ってなんだろう？科学者って、実は客観性という名の『認識的徳』と呼ばれる主観的で文化的な規範に従って研究活動を実施してきたのだという。その『認識的徳』の変遷の歴史を紐解く。
4 身体論	湯浅 泰雄	大庭 良介	心身一如を前提とする東洋的身体論を、東洋哲学と西洋哲学を行き来しながら展開する。本学で長年教鞭をとられた故・湯浅先生の代表的著作。
5 現代語訳 風姿花伝 PHP研究所	世阿弥	加藤 光保	日本について考える時、シンプルに表現された世阿弥のこの本は、大変読みやすく、能楽論であるとともに、日本人の感性や美意識の特徴について考える入門書として、何度も読み返したい名著です。
6 Robbins and Cotran Pathologic Basis of DISEASE ELSEVIER SAUNDERS	Kumar, Abbas, Aster ed.	加藤 光保	これは、読んでみたらと推薦するというより、人の病気について、どのような原因でどのような異常が起こって発生するのかを知りたい時に、調べる最初の本として推薦するものです。世界中の医学生が病気のことを一番最初に体系的に学ぶ教科書で、私が編集と「腫瘍」の章の執筆で参加した医歯薬出版の『解明 病理学』も、日本のRobbinsを目指してつくられた教科書です。
7 『自我の起原——愛とエゴイズムの動物社会学』（岩波現代文庫）	真木 悠介	葛山 泰央	〈生成子たち〉の永劫の転生の旅を通して、近代的自我の「個性性」や「主体性」や「自己意識」の起原を浮き彫りにした作品。
8 『社会学入門——人間と社会の未来』（岩波新書）	見田 宗介	葛山 泰央	社会学という学問は〈関係としての人間の学〉であり、初発の問題意識に貫かれた〈越境する知〉でもあることを明快に論じた作品。
9 『パリ感覚』（岩波現代文庫）	渡邊 守章	葛山 泰央	中世以来ヨーロッパの中心として「フランスの精髓」を体現してきた都市パリを、河岸の景観や大聖堂の機能、権力装置や劇場＝文化装置、日常生活の典礼や共和国の記憶などのトピックから多面的に考察した作品。
10 『マルク・ブロックを読む』（岩波現代文庫）	二宮 宏之	葛山 泰央	リュシアン・フェールと共に雑誌『アナル』を創刊し、現代歴史学に革命をもたらした歴史家マルク・ブロックの波瀾万丈の生涯を、その学問史上の位置づけから、主要な作品の仕組みを経て、生きられた歴史に至るまでの一貫した視座から読み解いた作品。

11	『重力と恩寵』（岩波文庫）	シモーヌ・ヴェイユ (著)、富原 眞弓 (訳)	葛山 泰央	第二次世界大戦下に34歳で夭折した哲学者の「雑記帳（カイエ）」からの断章を抜粋したもの。怯懦と妥協を許さない純粹の希求、人類共通の運命たる不幸への共苦、悲惨な状況においても絶望しない勇気の証言として、敗戦と占領の記憶に深く傷ついていたフランスの人心を鼓舞した作品。 「『今こそ死は、目（まなこ）の光を奪い去って、これまで穢した日の光も、元の如く淨らかに、澄みわたりゆく.....』(ラシーヌ（作） 渡邊守章（訳）『フェードル アンドロマック』（岩波文庫）からの引用)。―― わたしは消滅せねばならない。わたしの眼にするこれらの事物が、わたしの眼にする事物ではなくなることで、完璧に美しいものとなるために。」
12	離散数学への招待(上・下)	J. マトウシエク & J. ネシエトリル	古賀 弘樹	離散数学の専門書ですが、随所に遊び心が散りばめられていて、他に類を見ない本です。定理の証明も無駄なくすっきり書かれています。第2章の包除原理の3種類の証明を是非読んでください。いろいろなトピックが書いてあるので、学部1年から博士前期課程まで楽しめます。なお原著は第2版が出ています。
13	世にも美しい数学入門	藤原 正彦/小川 洋子	古賀 弘樹	「博士の愛した数式」の著者の小川洋子と数学者の藤原正彦の対談形式の本です。天才数学者が生まれる3つの条件は必読で、個人的には数学者に限らなくてもいいように思えます。「博士の愛した数式」を先に読むとより楽しめます。映画「奇蹟くれた数式」でラマズジャンを知るともっと楽しい。数学者でない私だから言えることなのかも。
14	Black Box Thinking: Why Most People Never Learn from Their Mistakes - But Some Do (原題) 失敗の科学 失敗から学習する組織、できない組織	Matthew Syed 有枝 春 (訳)	粉川 美踏	「若い頃はどんどん失敗してもいいんだ」とよく言われますが、やっぱり失敗は嫌ですよ。この本の著者は、失敗から学ぶ事こそが文化や技術の発展に寄与してきた、と主張しています。つまり、失敗を避ける人はたくさんのチャンスを逃している。この本を読んだからといって失敗が怖くなくなったわけではないですが、ちょっと意識的に挑戦をしてみるようになったと思います。
15	リサーチの技法	ウェイン・C・ブース [ほか] 著 ; 川又 政治 訳	鈴木 大地	リサーチのスキルは、大学生や大学院生、研究者としてだけでなく、大学を卒業したあとの社会人としてもきわめて重要である。本書は、リサーチの意義から始まり、問いの発見や課題の設定、文献やデータベースの調査、議論の組み立て、報告書の執筆などの方法を体系的に解説する。文系理系を問わず、すべての大学生におすすめしたい一冊。
16	哲学してもいいですか? : 文系学部不要論へのささやかな反論	三谷 尚澄	鈴木 大地	「役に立たない」学問の筆頭(!?)である哲学と、哲学を教育することの社会的意義が、軽妙な文体で論じられる。「臆病な悟りの文化」や「ことなかれの優等生主義」に生きる現代の若者についての論評は、学生の耳に痛いかもしれない。国立大学の現状や大学教員の業務についても論じられるので、学生とは別の視点から大学について考える材料にもなる。
17	大衆の反逆	オルテガ・イ・ガセット 著 ; 佐々木 孝訳	鈴木 大地	哲学者オルテガが、他人と同一であることに快感を覚え成り行きまかせで生きる凡俗な人々＝大衆を批判する書。科学者や医者、技師といった専門家も、細分化された領域に閉じこもり、世界の運命について少しも考えずコミットしようとしなない点で、むしろ大衆の典型である。世界がポピュリズムに席卷されつつある今こそ読み直したい名著。
18	大学の使命	オルテガ・イ・ガセット 著 ; 井上 正 訳	鈴木 大地	『大衆の反逆』で現代社会にはびこる大衆を批判した哲学者オルテガによる大学論。大学は哲学者ヤスパースが『大学の理念』で論じたようなエリート教育の場ではなく、平均的な人々が「大衆化」せずに、混沌であり密林である生に「道」を見出そうと努力するための諸理念の体系＝教養を身につけるための場であるとオルテガは論じる。
19	歴史としての学問/パラダイムと科学革命の歴史 ※タイトルは異なるが、中身は同じ	中山 茂	鈴木 大地	科学を含めた学問の歴史が、東洋と西洋の文化比較から論じられる。端的に言えば、東洋の学問は記録的（書かれた文化）、西洋の学問は論争的（話す文化）なのだという。西洋での筆記試験の実施には中国の科挙の影響があったという興味深い指摘をはじめ、細かい記述も読んでいて楽しい。
20	生物学者のための科学哲学	コスタス・カンブラーキス、トビアス・ウレル編 ; 鈴木大地 [ほか] 訳	鈴木 大地	(科学) 哲学は、生物学などの理系分野を学んだり研究したりするうえでも実際に役に立つ。本書では、「科学的説明とは何か」「科学における概念の役割とは何か」といった科学哲学における重要な問題が、生物学での実例と関連づけて議論される。科学と哲学の関わりを知るための最初の一冊としてぜひ。
21	動物意識の誕生 : 生体システム理論と学習理論から解き明かす心の進化 (上・下)	シモーナ・ギンズバーグ、エヴァ・ヤブロンカ著 ; 鈴木大地訳	鈴木 大地	意識については、数多くの哲学者や科学者が頭を悩ませてきた。本書は、アリストテレスから始まる哲学、心理学、生物学、神経科学などの古今の議論を総動員しつつ、独自のアプローチで意識の進化を解明しようと試みる。学際的な研究の例として特に優れた著作。
22	数学の認知科学	G.レイコフ、R.ヌーニエス 著、植野義明、重光由加訳	鈴木 大地	高度に抽象的な数学も、実はヒトの身体性や脳の特性に基づくメタファー思考の産物である。あのオイラーの公式すら、そうしたメタファーの組み合わせで成り立っているのだ。数学観が大きく変わる一冊。
23	利己的な遺伝子	リチャード・ドーキンス 著)、日高敏隆、岸由二、羽田節子、垂水 雄二訳	鈴木 大地	「種の保存」という考えは、現代の進化生物学からすると誤りである。自己を犠牲にして他個体を利するようみえる行動も、遺伝子のレベルで見れば、自己の遺伝子を拡散させるのに役立っている。進化理論の核心を鮮やかな筆致で描き出す、進化生物学者で稀代のサイエンスライター、リチャード・ドーキンスの主著かつデビュー作。
24	眼の誕生 : カンブリア紀大進化の謎を解く	アンドリュー・パーカー 著、渡辺政隆、今西康子訳	鈴木 大地	約5.4億年前のカンブリア紀に、動物は爆発的に多様化した。現代の主要な動物群はこのときすでに揃った。本書の著者アンドリュー・パーカーによれば、その原因は、外界を映像として捉える眼の獲得にあったという。まるで推理小説のように、大きな謎が画期的な仮説で読み解かれる刺激的な科学本。

25	博士になったらどう生きる？ －78名が語るキャリアパス－	栗田 佳代子 吉田 類	棚橋 沙由理	ポストドク問題、高学歴ワーキングプア－現代に生きる若手研究者の多様な道のりをたずねる本。七十八人七十八色の人生から、ユニークな人柄も感じることができます。研究者をめざすめざさないに関わらず、ライフプランの参考にしてみたいかがでしょうか。悩んだとき迷ったときの一冊してもどうぞ。
26	歴史でわかる科学入門	ウィリアム・F・バイナム	棚橋 沙由理	高校で学ぶ理科は物理、生物、化学そして地学ですが、それぞれのディシプリンはどのように深化してきたのでしょうか。この本では、「科学」という概念が成立するはるか以前の古代から現代までの科学の変遷について、その時代の「科学者」にスポットを当てながら触れていきます。日本でもよく知られる中東・中国ないしインドの古代文明に芽吹いた科学の片鱗や伝統医学あるいは古代ギリシャの原子論や天動説。1章が数ページ程度ですので、毎晩1章ずつ読み進めることができます。
27	教え学ぶ技術－問いをいかに編集するのか	苅谷 剛彦、石澤 麻子	坪内孝司	オックスフォード大学の現職教授である苅谷剛彦先生が、同大学の学生である石澤麻子さんとの間で、オックスフォード大学で行われているチュートリアル学修の方法を実践しながら日本語で紹介した書籍。本学の学士課程高年次ではお手本にしたい、オックスフォード大学で行われているチュートリアル学修の実際を知ることができる本。 <a href="https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480072498/">https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480072498/</a>
28	『Transformation by Designデジタルトランスフォーメーションに挑戦するデザイン戦略とサービスブランニング』	富士通	坪内孝司	「創造的デザイン思考」の考え方の定義を捜し歩いていた時に出会った本。デザイン思考とは何か？という問いに答えてくれる内容を含む、が、デザイン思考の定義は山ほどあって、この本に書かれている内容が唯一解、というものではないだろう。でも参考にはなる。 <a href="https://www.fujitsu.com/downloads/DESIGN/document/transformationbydesign-jp.pdf">https://www.fujitsu.com/downloads/DESIGN/document/transformationbydesign-jp.pdf</a>
29	失敗百選シリーズ（全3巻） 失敗百選／ 続 失敗百選／ 続々 失敗百選	中尾 政之	坪内 孝司	世の中に発生した様々な事故は、41の原因類型からなる、と喝破した本。世の中に知られた大事故を取り上げて、その原因を解題している。事故を含め、日常の身近でも起きる失敗には因果関係がある。失敗したとき、原因を推定することはよくやるが、さらに一歩転じて、日常の失敗につながりそうな原因をみつけて転ばぬ先の杖を身につけ失敗（事故）の回避をすることは、様々な損失を低減するために必要なことである。本書は、そのような転ばぬ先の杖を思考の中に取り入れることに役立ちそうな本。工学を志す人には特にお勧めかもしれない。 <a href="https://www.morikita.co.jp/books/mid/066471">https://www.morikita.co.jp/books/mid/066471</a>
30	ホンダジェット 開発リーダーが語る30年の全軌跡	前間 孝則	坪内 孝司	あの自動車メーカーのホンダが、ビジネスジェット機を開発して販売するまでの軌跡をルポした本。事業としての成立性と、技術開発のロマン？の両立をいかにして開発と実用化をなしとげたか、を垣間見ることができる。主翼の上にエンジンを立てるアイデアも斬新だが、そのアイデアに行きつくプロセスも紹介されている。技術者を目指し、その開発したものが世の中で使われることに喜びを感じたい人ならきっと面白いと思う。 <a href="https://www.shinchosha.co.jp/book/100431/">https://www.shinchosha.co.jp/book/100431/</a>
31	未来職安	柞刈 湯葉（いすかりゆば）	坪内孝司	近未来小説。ベーシックインカムが導入され、普通の生活なら労働をしなくても済む社会に生きる一人の女性が主人公。AIやロボットが当たり前前に生活に溶け込み、極めて高い生産性のある企業によって社会経済が成り立っている世界をシュールに描いている。近い将来にこんな社会がよいのか望まないのか、それを考えるのに役立ちそうなフィクション。 <a href="https://www.futabasha.co.jp/book/9784575524406000000">https://www.futabasha.co.jp/book/9784575524406000000</a>
32	もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら	岩崎 夏海	坪内 孝司	ピーター・F・ドラッカー（1909-2005）は、「知の巨人」「マネジメントの父」と称される経営思想家。会社経営やマネジメントに関する著書が多数ある。 <a href="https://drucker.diamond.co.jp/works/index.html">https://drucker.diamond.co.jp/works/index.html</a> その代表的名著が「マネジメント」。岩崎夏海は、高校の弱小野球部の女子マネージャーがこの名著「マネジメント」を読んで目覚め、甲子園に出場するまでを青春小説として描いた。楽しみながら読めるストーリーの中にドラッカーの名著の真髄をはめ込んだ巧著だと思う。リーダーシップをとるにはこれか！と思った本。通称「もしドラ」。これを読んで予備知識を仕込んでからドラッカーの名著に挑戦してはいかがでしょう？ <a href="https://www.diamond.co.jp/book/9784478012031.html">https://www.diamond.co.jp/book/9784478012031.html</a>
33	もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「イノベーションと企業家精神」を読んだら	岩崎 夏海	坪内 孝司	「もしドラ」の著者が、ドラッカーのまだある名著「イノベーションと起業家精神」の真髄をはめ込み、「もしドラ」の続編として出版したベストセラー。これもまた面白かった。通称「もしイノ」。こちらも「もしドラ」とともに、目標への挑戦やそれを目指すリーダーシップとは何かを考えせられた。これも読んだら、またドラッカーの名著に挑戦、できるかな？ <a href="https://www.diamond.co.jp/book/9784478066492.html">https://www.diamond.co.jp/book/9784478066492.html</a>
34	数学30講シリーズ（全10冊） 微分・積分30講／線形代数30講／ 集合への30講／位相への30講／解析入門30講／ 複素数30講／ベクトル解析30講／群論への30講／ ルベーグ積分30講／固有値問題30講	志賀 浩二	坪内 孝司	このシリーズで最初に出会ったのは、「ルベーグ積分30講」。ルベーグ積分など習ったことがなかった私が、当時助手として赴任した大学で、いきなりこれを含む演習の担当を命ぜられて途方に暮れ、さらにその時指定された教科書（伊藤清三「ルベーグ積分入門」）を読んでもよくわからずさらに途方に暮れた時に出会った。この本の書きぶりがとても気に入り、全10巻すべてを手元にそろえた。シリーズのどれも語り口が柔らかく、しかし決して甘くはなく、しかも大学の理工学関係の学科では初年級で学修することが多い基礎的な数学それぞれの「しらべ」がわかってくる名著だと思う。 <a href="https://www.asakura.co.jp/nl/series0101.html">https://www.asakura.co.jp/nl/series0101.html</a>
35	大人のための数学シリーズ（全7巻） 1数と量の出会／2変化する世界をとらえる／3無限への飛翔／4広い世界へ向けて／5抽象への憧れ／6無限をつつみこむ量／7線形という構造へ	志賀 浩二	坪内 孝司	数学30講シリーズにはまって、志賀先生の著作を調べていて出会ったのがこのシリーズ。数学30講シリーズ同様、柔らかな語り口でありながら、数学の体系をしっかりと味わいで、それぞれのトピックスを解説する筆致に感銘をうけた。理工系の大学の初年級の数学を知っていれば読めてしまう。講義に使われるような教科書を読んだだけでは気づけない面白さを感じた大人向けの数学解説。これも名著だと思う。

36	夢の色、めまいの時	大林 宣彦	坪内 孝司	映画監督の大林宣彦が、尾道3部作や新尾道3部作を撮って間もないころの出版で、いささか古く絶版本ではあるが、大林映画をよく観ていた大学院生だったころに読んで今でも印象に残っている。「減点法ではなく得点法で考える」という一節が当時の私に刺さり、今でも刺さっている。表面的には様々な俳優とのエピソードや映画の制作秘話が内容ではあるが、この映画監督の映画作家としてのこだわりや、映画の撮影クルーに対するリスペクトとリーダーシップのありようを深読みすると、おのずから大林監督の人生訓が見えてくる気がした。それも、今の自分の生き方に多少なりとも影響を与えている。
37	数学する身体	森田 真生	坪内 孝司	第15回小林秀雄賞受賞作。著者の森田氏は、特定の組織には属していない独立研究者。研究を続けながら、数学にまつわるライブ活動や著作をしている。数学の本といえば、数式の羅列や理論の解説か、という印象もあるが、人と数学とのかかわりを深く論考した本である。数学に対するこのような光の当て方も、数学の問題をたくさん解いてきた経験からすると新鮮なのではないだろうか？ <a href="https://www.shinchosha.co.jp/book/339651/">https://www.shinchosha.co.jp/book/339651/</a>
38	<知の三部作> (全3巻) 知の技法／ 知の論理／ 知のモラル	小林 康夫 船曳 建夫編著	坪内 孝司	「知の技法」は東京大学教養部で1993年度から文科系（文I, 文II, 文III）の1年生を対象として開設されている必修科目「基礎演習」のサブテキスト。「知の技法」出版直後から反響を呼び、「知の技法」には織り込めることのできなかつた内容を含め編まれたのが「知の論理」と「知のモラル」。出版から30年たち、「知の論理」と「知のモラル」は新装版が昨年出版された。東京大学の教授陣が執筆した論考が集められている本でありが、その内容はやや難解かもしれない。しかし、それを丁寧に読み解きながら、critical thinking をしながら「知」というものがなにか、大学での学問とは何かを掘り下げて考えてみようとするなら、これらの本をまず読んでみて、そこから始めてみることも一考かもしれません。 <a href="https://bunkyo.repo.nii.ac.jp/record/3940/files/BKSF010013.pdf">https://bunkyo.repo.nii.ac.jp/record/3940/files/BKSF010013.pdf</a>
39	弥生人はどこから来たのか—最新科学が解明する先史日本	藤尾 慎一郎	坪内 孝司	考古学といえば文科系の学問のような印象をもつが、炭素14年代測定法や酸素同位体比年輪代、DNA解析やレプリカ法など、最新の自然科学的（理科系的？）手法によるエビデンスをもって、弥生時代の人々の生活を描き出していることに感銘を受ける。まさに、考古学と自然科学のカップリングによる学際研究の最前線を紹介する本（2024年3月新刊）。文系・理系の垣根を超える、トランスボーダーな学問分野の例としても興味深いが、様々な証拠を組み合わせて、いくつも立てられる仮説から、証拠に矛盾する仮説を排除して、残る仮説からあり得る姿を推理していく様に学問の醍醐味を感じて面白い。2024年4月現在、私も読んでいます真っ最中！ <a href="https://book.asahi.com/article/15216515">https://book.asahi.com/article/15216515</a> <a href="https://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b10045004.html">https://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b10045004.html</a>
40	オイラーの贈物 新装版: 人類の至宝 $e^{i\pi}=-1$ を学ぶ	吉田 武	坪内 孝司	この本のハイライトは、オイラーの公式 $e^{i\pi}=-1$ の導出である。そして、その導出は第8章の1ページで終わる。第1章から第7章までは、その導出のために費やされるが、他の書籍の参照はせず、高校数学の知識があれば読める内容になっている。言い換えれば、第7章までの記述が、オイラーの公式を導くすべての知識となる。この1冊で、数学の理論体系の構造の例がわかるし、一つ一つの定理を導出する過程そのものが極めて重要であることもわかる。論理的思考能力を養うのにもこの1冊をじっくり読むことが良いのではないかと思う。
41	物理学とは何だろうか 上・下 (岩波新書)	朝永 振一郎	中務 孝	読み終わった時に、この続きを読みたいと思わせる未完の名著。物理学を定義することは不可能けれども、無定義のものを語るこの本全体で「物理学とは何だろうか」の答にするという、禅問答かというような書き出しで始まるが、歴史書を読むように引き込まれる。
42	ランダウ=リフシッツ理論物理学教程「力学」(東京図書)	ランダウ=リフシッツ	中務 孝	物理初学者の誰もがショックを受ける教科書。わずか10ページ程度の第1章を読み切れる大学1年生が果たしているのか。自分は2、3ページで挫折した。朝永の教科書と正反対、物語として引き込まれる面白さはないが、あらゆる無駄を削ぎ落としてエッセンスだけにすると力学ってこうなるんだらうって思う。挫折の味を知りたい1年生に。
43	プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 (岩波書店)	マックス・ウェーバー (大塚久雄訳)	山中 弘	本書は、ウェーバーの膨大な業績の中で最も著名なもので、宗教社会学の古典的名著です。資本主義という経済体制の形成過程に、一見すると全く関係のないようにみえる宗教的信仰が深く関与していたとする本書のウェーバーの大胆な仮説は、学問的な推理小説を読んでいるような知的興奮を覚える著作です。決して読みやすい文体ではありませんが、是非、一読してほしい著作です。
44	社会科学の方法—ウェーバーとマルクス (岩波新書)	大塚 久雄	山中 弘	著者の大塚久雄さんは日本のウェーバー研究の第一人者の一人です。本書は、理論的にも実践的にもウェーバーの対極に位置するカール・マルクスと比較しながら、ウェーバーの理論的立場を解説し、そもそも社会科学という方法論がどのようなものなのかを平明な文体で述べた古典的な入門書です。
45	マックス・ヴェーバー入門 (岩波新書)	山之内 靖	山中 弘	社会学の学問的歴史に大きな足跡を残したウェーバーには、その業績を解説した数多くの入門書が出版されています。ウェーバーのどの入門書を読んでも構いませんが、比較的新しく手に入りやすく本書を読んで、ウェーバーの学問的世界を味わってみるのもいいかもしれません。